

## 言語のインフレーションのなかで

— George Steiner の *The Portage to San Cristóbal of A. H.* を読む —

田部井 孝 次

### 1. ことばは沈黙を超えるか

「アウシュヴィッツ以降、詩を書くことは野蛮である」(34) というテオドル・アドルノ (Theodor W. Adorno) のことばはあまりにも有名であるが、もしかしたら、ナチスによるあのユダヤ人に対する蛮行をことばで表現し、再現しようとする試みは、不可能に近いし、ましてや当事者にとっては二度と思ひ起こしたくないことかもしれない。それを思うと、このことを第三者がことばで表現するなど、猥褻という印象すら与えかねない。ジョージ・スタイナー (George Steiner) が「アウシュヴィッツの世界は、理性の外側にあるように、言語の外側にある」("K" 123) と言い、ローレンス・ランガー (Lawrence L. Langer) が「アウシュヴィッツのガス室や焼却炉を前にしては、ディケンズのような作家、メルヴィルのような作家でさえ、立ち尽くしことばを失ったかもしれない」(16) と言ったのは、まさにそのことであつた。「実際に地獄を通り抜けた者たち、(エリー・ヴィーゼルのように) 自分の親たちが目の前で叩き殺され、ガス室に入れられるのを見た後もアウシュヴィッツを生き延びた者たち、トレブリンカでの日常風景と化した、金歯を抜き取られた死体のなかに自分の身内を発見したような者たちだけが、許しの権利を持つ」("Postscript" 163) と言う、自らユダヤ人でありながら、直接戦争経験を持たないスタイナーのことばは、強烈な重みをもって迫ってくる。強制収容という問題を経験しない限り、憎悪とか許しとか言っても、それは単なる精神的なゲームでしかない、だから今一番いいことは黙っていること、言いようのないことに文学的、社会的論争のようなつまらないことを付け加えないことだとスタイナーは言う

("Postscript" 163)。

さて、スタイナーの言いたいことはそういうことだったか。『言語と沈黙』 (*Language and Silence*) で彼が言わんとしていたことは、そういうことだったか。確かに、『言語と沈黙』のなかで、彼は「ことばからの撤退」を提唱しているように見える。ことばによらない精神活動、たとえば、音楽、数学、絵画などによるコミュニケーションの可能性を探っている一方で、ことばの世界が縮小してしまったことを嘆いている ("The Retreat from the Word" 24)。いわばことばが間引きされ、ことば本来の機能が阻害され、「窓」となって外に向かってコミュニケーションの機能を果たすべきはずが、逆にことばそのものが「壁」となってコミュニケーションを阻む ("The Retreat from the Word" 21)。音楽も、数学も、絵画もスタイナーのことばを借りれば、「非言語的心的言語」 ("The Retreat from the Word" 23) である。たとえば、ヴァン・ゴッホは、とスタイナーは言う。「画家は目に見えるものを描くのではなく、感ずるものを描くと宣言した。目に見えるものはことばに置き換えることができるが、感じられるものは言語に先立つか、言語の外側のレベルで生じる」 ("The Retreat from the Word" 23)。

しかし、これはスタイナーが『言語と沈黙』で提唱した言語沈潜論ではないことを確認しておこう。音楽、数学、絵画など、ことばによらない「沈黙の言語」に期待を寄せながらも、それらに押されて縮小し、窓を失った言語、いわば言語の腐食に対するスタイナーの嘆きの声を見逃してはならない。「言語からの退却」がわれわれに何をもたらしたか。スタイナーが、歴史、倫理、経済学、社会的政治的行為などの分野における文字教養の復権をどれほど望んでいたかを知る必要がある。「私たちの新聞、法律、政治行動におけることばにある一定の明晰性と意味の厳格性を回復することができなければ、私たちの生活は混沌へと近づいていってしまうだろう。そうなれば、新しい暗黒の時代が始まるだろう」 ("The Retreat from the Word" 35)。これがスタイナーの言わんとするところだ。アドルノが言うように、「アウシュヴィッツ以降、詩を書くことは野蛮」なことかもしれない。ヴィーゼルのような、強制収容所の悲惨な現実を経験した者でなければ、それについて何を言おうと単なるスキャンダ

ラスなおしゃべりに成り下がる危険性について回るのかもしれない。それでも、スタイナーが『言語と沈黙』で言いたかったことは、言いようのないものを前にしてもただ沈黙することだけではおさまらなかった。音楽でもない、数学でもない、ましてや絵画でもない。言いようもないものを、ことばによって伝えること。ことばからの撤退は言語の敗北以外の何ものでもないことを、彼は身にしみて知っていたのである。

実は、スタイナーが恐れていたのは、言語の縮小ではなく、インフレーション（膨張）だった、と言うと奇抜に聞こえるだろうか。大衆文化と大衆政治の時代にことばが濫用され膨張して、その価値が切り下げられる。こういうことばのインフレーション的氾濫のなかで、ひとに何を聞いてもらえるか ("Silence and the Poet" 46)。これがスタイナーのかかえた不安だった。だから、彼は常に沈黙の効用を意識せざるを得ない。詩人が独自の創造性を維持しようとするれば、沈黙するしかない。

It is also part of a recognition, developed during the Romantic movement and given new metaphors of rationality by Freud, that art, so far as it is public communication, must share in a common code of surface meaning, that it necessarily impoverishes and generalizes the unique, individual life-force of unconscious creation. Ideally each poet should have his own language, singular to his expressive need; given the social, conventionalized nature of human speech, such language can only be silence. ("Silence and the Poet" 49)

「私たち作家は書くのをやめるべきだと言っているのではない」とスタイナーは言う。そうではなく、作家たちは「書きすぎているのではないか」と彼は問うている。昨今の印刷物の洪水それ自体が意味の破壊をもたらしているのではないか。

"A civilization of words is a civilization distraught." It is one in which

the constant inflation of verbal counters has so devalued the once numinous act of written communication that there is almost no way for the valid and the genuinely new to make themselves heard. ("The Silence and the Poet" 53)

言語には限界がある。光があり、音楽があり、そして沈黙があり、この三つの表現法に境を接し、綱渡りのようなアンバランスな世界でどう均衡を保ち、ことばとしての光を放つか ("Silence and the Poet" 39)。これがスタイナーの最大の関心事だ。その実践者として、彼の前にシルヴィア・プラス (Sylvia Plath) がおり、フランツ・カフカ (Franz Kafka) がいた。プラスは当然のことながら、ヴィーゼルと違って直接ナチスによるユダヤ人大量虐殺を知らないし、ましてや死の強制収容所のことなど知る由もない。彼女にあるのは、詩人としての想像力と理性と感性だった。そしてあの "Daddy" という詩で堪え難い死の恐怖を表現した。スタイナーはそれを現代詩における「ゲルニカ」とまで持ち上げた。

In "Daddy" she wrote one of the very few poems I know of in any language to come near the last horror. It achieves the classic act of generalization, translating a private, obviously intolerable hurt into a code of plain statement, of instantaneously public images which concern us all. It is the "Guernica" of modern poetry. ("Dying Is an Art" 301)

ことばの氾濫、膨張のなかで沈黙の誘惑に右往左往しながらも、スタイナーは的確な意味を持ち、読み手にその意味を伝えることのできる詩を見出した。そして私たちの時代の闇を証言できるものはカフカをおいていない、とまで言い切った ("K" 126)。ことばは沈黙を超えるか。ことばは、ことばのインフレーションの真ただ中であって、ことば本来の意味を伝えうるのか。この試みが『サンクトバルへの A.H. の移送』(*The Portage to San Cristóbal of A. H.*,

以後『A. H. の移送』と表記)であった。

## 2. ヒトラー礼賛か、ヒトラー批判か

本来評論家であるスタイナーが、フィクションという形で言語の可能性に挑戦したのが『A. H. の移送』であった。ことばの膨張と氾濫が、意味を違えて何をもたらすか、おそらくスタイナーは評論家生命を賭けて、普段手慣れない小説世界で綱渡りのような実験を試みたのだ。だから、出版当初、誤解も多く生じた。ロンドンでの上演にあたって、一部批評家からこっぴどい批判も受けた。それでもスタイナーの決意は揺るがなかった。沈黙か言語か。この小説はスタイナーの一大実験小説だったのである。読み手は、そこに書かれたことばの意味を取り違えないか。取り違えたとしたら、やはり、沈黙。いや彼には自信があった。誤解を受け止める覚悟があった。

だから、この小説を読み解く側にもそれ相応の覚悟が要求される。字面を追って、意味を取り違えて読むことは往々にして起こりうることだからだ。おそらくスタイナーはそれを承知で書いているのだ。ユダヤ人でありながら、反ユダヤ思想の持ち主、ナチス親派だと。この思わせぶりが単なる思わせぶりであることを証明することが、本論のテーマである。なぜこのような危なっかしいまねをしてまで、この小説をものする必要があったのか。以下、スタイナーの曲芸的手腕を見てみよう。

『サンクリストバルへの A. H. の移送』のサンクリストバルとは南米ベネズエラ南西部にある都市。そこへナチ・ハンターたちが A. H. ことアドルフ・ヒトラーを移送するという話である。死んだはずのヒトラーがアマゾンのジャングルの奥地で生きていた。90歳になって老いさらばえてはいても、ナチ・ハンターたちにとってはヒトラーはヒトラーだ。どんなことがあってもサンクリトバルまで連れてゆき、ヒトラー逮捕を世界に知らしめねばならない。だが、ジャングルを抜け出すのは、並大抵のことではなかった。相手は90歳の老人だ。これ以上の移動は無理とみたハンターたちは、やむを得ずジャングルのな

かで裁判を試みる。そして、小説は、ヒトラーの弁明をもって突然幕が下りる。なんともあけない幕切れだ。当然判決はない。小説の最終章17章(約10ページ)はまさにヒトラーの独壇場だ。1981年出版直後、ただちに劇化されロンドン、ニューヨーク等で演じられているが、その際のヒトラー弁明の長さ、約25分間。延々と続く独演に観客はうんざりするどころか、拍手喝采の嵐が続いたというから驚きである。ヒトラーになりきって演じた俳優のうまさに対してか、はたまたヒトラーの催眠術的毒気に当てられたか、定かではないが、評判はなかなかのものであったらしい。

それにしても、小説の終わり方からして、問題小説であることは容易に察しがつく。嘘かまことか、ヒトラーが生き残っていたという話は、別に珍しくもない。よく聞いた話だ。だが、問題はなぜ結末をヒトラーの独演会のごとき章で終わらせる必要があったかということだ。わざわざ1章まるまる、10ページにもわたって、90歳の老人の弁明を聞かされる羽目になるとは。これに真っ先に批判の声をあげたのが、ハイアム・マッコビー (Hyam Maccoby) だ。彼はこの結末にスタイナーの反ユダヤ主義を嗅ぎ分ける。そしてこの小説の背景に関して、「神学的、歴史的に薄っぺらで妥当性を欠いている」(34) と言い、彼の理論を単なる「背理法」を弄しているにすぎないとこき下ろしている。このような批判の声は、劇の好評に反して、衰えるどころか勢いを増してきている感があるが、当然と言えば、当然の成り行きかもしれない。なぜヒトラーの弁明で小説が終わってしまうのか。これでは、ヒトラーの人権回復を企む書とられても致し方ない。90歳とはいえ、至って元気はつらつ、ドイツ大統領の時のように、堂々として自己弁明をまくしたてるのだから、ユダヤ人ならずとも、読んでいて嫌気がさすと言っても過言ではない。出版の4年後、アルヴィン・ローゼンフェルド (Alvin Rosenfeld) は、マッコビーに負けじとしっかり理論武装して批判を展開している。彼が問題にするのは、ヒトラーが最後に弁解的演説をする、ということいとどまらない。ヒトラーの言っている内容が、作者スタイナー自身が日頃論じている内容とほとんど一致している、という一事だ。

What baffles in this instance, though, are not Steiner's ideas but their transference almost verbatim into the mouth of Hitler, as if Steiner's understanding of Hitler were identical with the latter's self-understanding. Moreover, by releasing a number of his previously considered ideas into the mouth of Hitler, Steiner has reduced his thought from the more disciplined tones of exposition to the level of a pompous political harangue. (98)

だから、ここには作家と主人公の間に必要な距離が存在せず、その結果、野蛮で蓋然性もなく、不調和な感じで小説が終わっていると批判する。まったくそのとおりかもしれない。小説がきわめて不愉快な印象を読み手に与えることは否めない事実ではある。ローゼンフェルドが危惧するのは、安易に作り出されるヒトラーのイメージだ。いわゆる「ナチもの」にありがちな、悪党をヒーローとしてもはやし、好きなようにヒトラー像をでっち上げる作家の姿勢に、そしてそれに対して大喜びする読者・観客に釘を刺すことを忘れない。その「ナチもの」の最たるものが『A. H. の移送』というわけだ。この最後のヒトラーの大演説は、この現象を「もっとも劇的にもっとも困惑させるやり方」(96)で例証していると言うのである。なぜか。スタイナーがああ役者張りのヒトラーに強く引きつけられていたからだ、とローゼンフェルドは見る。

Steiner was strongly taken by the histrionic Hitler, in whom he believed he had discovered a family resemblance to "the people of the word." Since he has long defined the Jewish vocation as essentially linguistic, and since he likewise understands the power of Hitler as rooted in the power of words, the temptation to incarnate the Nazi Führer as an exaggerated type of the Jew must have been strong. As essayist, Steiner probably would have resisted it, but as fiction writer he felt free to follow it out and ended up projecting a Hitler who not only wantonly defies the historical record but does so with a bravado

that appeals to the worst of human passions. (101)

ヒトラーが誘惑的なことばの使い手であることは、歴史が示していることでもあるし、ローゼンフェルドが言うように、その点でスタイナーがヒトラーに少なからず関心を持っていたことは否めない。ヒトラーのあの芝居じみた雄弁が、まるで乗り移ったかのように、スタイナーのヒトラーは歳をものともせず、取り憑かれたように自説を弁じ立てる姿を見ると、やはり、スタイナーは雄弁家ヒトラーに少なからず共感していたのではないかと思いたくもなる。

しかし、これでは、『A. H. の移送』はヒトラー礼賛の書ということになりかねない。マッコビー、ローゼンフェルドはおそらくそう思いたいのだろうが、実はそうではない。スタイナーが小説を書くにあたって綱渡りの綱に乗って、落ちないように、落ちないように歩いている、つまり書いていることを忘れると、英雄ヒトラー礼賛しか見えてこない。それどころか、この作品は、あえてヒトラーに語らせることによって、わざと長広舌を演じさせることによって、ヒトラーの、ヒトラーによる言語の失墜ないし腐食を狙った作品であることが判明する仕組みになっていることに気づかせてくれるのである。この作品はいったって巧妙かつ繊細だ。ことばの上でヒトラーがスタイナーに成りきる。あるいは、スタイナーがヒトラーに成り済ます。読者はややもするとそのような錯覚に陥る。それもそのはず、ヒトラー演説をどう読もうが、これはスタイナーの日頃の持論そのものなのだから。しかし、ここで重要なのは、あえてヒトラーに自らの論を語らせたスタイナーの落とし穴にはまらないことだ。いかにも平らな上っ面だけを見、すたすたと歩いて(すらすらと読んで)、ヒトラーが語ったスタイナーのことばの意味を取り違えないことだ。

### 3. なぜユダヤ人は嫌われるのか

19世紀末、オーストリアのウィーン滞在中のマーク・トウェイン (Mark Twain) は、ある言動がもとでユダヤ人差別者としてマスコミの批判を浴びたことがあった。その反論として、"Concerning the Jews" をものして、自分が

ユダヤ人差別者ではないことを証明することにやっきとなったことがある。トウエインによれば、ベルリンの弁護士、財界人の85パーセントはユダヤ人が占めている。キリスト教徒はユダヤ人には太刀打ちできない、このままでは、キリスト教徒が危ない、キリスト教徒のパンが危ない、生きていくためにはまずパンとそして肉、宗教は二の次。(だからユダヤ人を排斥しなければ、という声が聞こえてきそう) (241)。しかし、トウエインの真意はユダヤ人批判ではなかった。ユダヤ人迫害の原因を示そうとしたにすぎなかったのだが、世間はそう見なかった。わざわざユダヤ人の知的優秀性を云々して、それが迫害の理由、宗教は関係ないとトウエインは言うのだが、もっともと言えば、もっともな発言。反論する理由もない。しかし、スタイナーのユダヤ人迫害の理由は、トウエインの否定した宗教にあった。そしてこれが、そのまま『A. H. の移送』のヒトラーの口からそのまま出てくるから、スタイナーはヒトラーかという議論に発展してしまうのもやむを得ないことなのかもしれない。トウエインが誤解され批判されたのと全く同じ理屈だ。スタイナーによれば、パンが食えなくなるからユダヤ人排斥が起こった、などという単純なんものではないらしい。もっとも住んでいたところは、二人ともユダヤ人排斥の真ただ中とはいえず、トウエインとスタイナーは生きた時代が違い、当然トウエインはナチスによる大虐殺など知る由もなかったのであるから、その辺差し引かなければならないが、スタイナーの言うユダヤ人排斥の理由には注意深く耳を傾ける必要がありそう。そうしないと、おそらく『A. H. の移送』の最後のヒトラーの演説の謎が何も見えてこないどころか、大方の批判がそうであるように、あらぬ誤解からスタイナーに反ユダヤ主義者のレッテルを張る羽目に陥ってしまいかねない。これだけは、公平性からもさげなければならない。もっともスタイナー自身そのような誤解など百も承知なのだから、痛くもかゆくもないだろうが、スタイナーの名誉のためにも、少なからぬ反ユダヤの批判の誤解を解かなければならない。

すでに述べたように、誤解の発端はこうだ。ローゼンフェルドが指摘しているとおり、これはスタイナーのヒトラー礼賛とも取れる言説にあり、それがほとんどそのままの形で作品中のヒトラーの口から出ていることなのである。こ

れでは確かにスタイナー＝ヒトラー論が飛び交う口実になるのももっともなことではある。具体的に見てみよう。

ナチ・ハンターたちにアマゾンのジャングル奥地で捕われ、目的地であるサンクリストバルへの道を阻まれ、急遽ジャングルのなかで裁判を開くという異常事態のなかで、90歳のヒトラーは若いユダヤ人たちを前にして自己弁護の演説をぶち上げる。要は、なぜヒトラーが「最終的解決」としてユダヤ人絶滅を策謀したかの一点だ。ヒトラーのあげた理由は人間に対する三つの理想という恐喝だ。唯一神の発明、キリストの愛他主義、そしてマルクス主義。「全能ですべてを見通しながらも、こちらからは目に見えず、触知もできず、想像も及ばない神の発明ほど残酷な発明—人間存在を苦しめるために考え出された装置—が今までであったろうか」(164)とヒトラーは声を大にして言う。「君たちユダヤ人は神を殺したのではなく、神を作ったのだ。そしてそのことは限りなく悪いことなのだ。ユダヤ人は良心を発明し、人間を罪に苛む奴隷にしてしまったのだ」(165)。これが第一の理由。そして次にキリスト。「白い顔をしたナザレ人」「癲癩持ちのラビ」が人間に何を要求したか。

What did that epileptic rabbi ask of man? That he renounce the world, that he leave mother and father behind, that he offer the other cheek when slapped, that he render good for evil, that he love his neighbor as himself, no, far better, for self-love is an evil thing to be overcome. Oh grand castration! Note the cunning of it. Demand of human beings more than they can give, demand that they give up their stained, selfish humanity in the name of a higher ideal, and you will make of them cripples, hypocrites, mendicants for salvation. (165)

人間に現実以上のものになることを要求する。疲れた目に、聖者か狂人のみがか触れることのできるような利他主義、憐れみ、自己否定のイメージを植え付ける。ユダヤ人の「理想中毒」(166)より残酷なものがどこにあるというのか、とヒトラーは吠える。それに比べれば強制収容所がなんだ、とすぐんでみせる。

正義と愛を説く「山上の垂訓」。ここに、ヒトラーはキリストの甘美なまでの恐ろしさを見る。そして三幕目がマルクスだ。「あなたの同胞のためにあなた自身を犠牲にせよ。万民が平等になれるようにあなたの財産を放棄せよ。あなた自身をハンマーで打ち、鋼のように強固にせよ。感情や忠誠心や慈悲の念を押し殺せ。親や恋人を弾劾せよ。この世で正義が達成されるように。歴史が成就され、社会からすべての不完全が排除されるように」(166)。これがヒトラーの言うマルクスの説教だ。「三度ユダヤ人は、私たちに超越の脅しをかけた。三度ユダヤ人は、私たちの血と脳を完全というバクテリアに感染させた」(166)。何が理想を追い求めよだ。何が超越せよだ。人間にできもしないことを押し付けて、苦悩のどん底に追い落とし、その苦しみから這い上がれないものは地獄に突き落とす。だから、ユダヤ人は排除しなければならなかったのだ。そして人間らしく、人間本来の欲望を満たす必要があったのだ。そのどこが悪い。ユダヤ人の人間いじめに比べれば、ホロコーストなど、ショアなど、ものの数ではないではないか。これが、『A. H. の移送』におけるヒトラーの弁明だ。演劇にして25分。本にして10ページ。総統として世界を震撼させたヒトラーの催眠術的演説を彷彿とさせる、延々と続くヒトラーの朗々たる声がジャングルに響き渡る。

しかしどう聞いても、これはヒトラーの単なる自己正当化以外の何ものでもない。おぞましいまで生に執着する90歳の戯言、そう言い切れればことは簡単だが、このヒトラーの戯言が、実は原作者スタイナーの言説、ユダヤ人観と重なるから厄介である。作中のヒトラーがあげたユダヤ人による三つの恐喝、神（あるいはモーゼ）、キリスト、マルクスは、スタイナーの一貫した持論でもあるのだ。1971年 *In the Bluebeard's Castle* (41~47)、1988年 "The Long Life of Metaphor: An approach to the 'Shoah'" (164)、1996年 *No Passion Spent* (341)、1997年 *Errata: An Examined Life* (57~62) 等々。ヒトラーとの比較の意味で、最初の『青髭の城にて』のユダヤ人観は大いに参考となるだろう。（それ以降のユダヤ人論はこの二番煎じ、三番煎じと考えてよかろう。と言うと聞こえはよくないが、要するにスタイナーのホロコースト原因説明が揺らぐことはなかったということだ）。「犠牲的自己否定」、「エゴイズムの排除」、

「愛他主義」というキリストの至上命令、実行に移すにはあまりにも高邁な、現実離れした道德要請。このキリスト教倫理の根本にどのくらいの人が答え得たのだろうか、とスタイナーは問う。

That imperative was stated and restated innumerable times in the course of Western history. It is the staple of Christian ethics, of the Christian doctrine of right living. How many could hope to respond adequately? In how many human careers were these prescripts of ascetic love, of compassion, of self-suppression, more than a Sunday tag? Apologetics of practical life, the prodigal economics of repentance, and "a fresh start," papered over the deep cracks between secular existence and the eschatological demand. (*In the Bluebeard's Castle* 42)

当然のことながら、現実と道德要請との間に横たわる裂け目を完全にふさぎおおせるものではなく、対立は目に見えていたのである。この深刻なまでのアンバランスが人間の深層意識に浸食作用を及ぼしたのではないかと、スタイナーは論じる(43)。第二の楽園を夢見るメシア的社会主義。マルクスの千年王国の夢。この夢の実現に向けて数多くの人間が死んできたが、それでもその夢の牽引力が弱まることはなかった。「利得と利己主義を打ち捨てよ。個人的存在を社会的存在のなかに融合せしめよ。この夢に逆らう者は狂人であるばかりか、社会の敵だ」(44)。スタイナーは言う。「ユートピアの神は妬み深い神なのである」(44)。シナイ山上の一神教、原子キリスト教、メシア的マルクス主義、この三つの段階を経て、西洋は意識の超越という経験を脅迫的に迫られてきた、とスタイナーは説く(44)。己自身に打ち勝つこと、精神的障害物を超越すること、財産も地位も安楽も捨てること、己自身と同じように、いや己以上に己の隣人を愛すること、こういった正義の強制、完全への脅迫、理想の強要が執拗に繰り返されてきた。だから、あの大量虐殺には、我慢の限界を超えたヴィジョンの押し付けに対する狂気じみた報復と激しい罵倒があったのであり、抹

殺しがたい理想の保持者たるユダヤ人を根こそぎにしようとしたのだと、スタイナーは解き明かす (46)。これはそのまま自作のヒトラーの言い分だ。ホロコースト説明は、作中のヒトラーの前に、すでにすべてスタイナー自身解明していたことだったのだ。「人間本来の野蛮性」「知性の愚鈍さ」本能的な物欲」を前にして、理想はひとたまりもない。スタイナーは言う。

Using theological metaphors, and there is no need to apologize for them in an essay on culture, the holocaust may be said to mark a second Fall. We can interpret it as a voluntary exit from the Garden and a programmatic attempt to burn the Garden behind us. Lest its remembrance continue to infect the health of barbarism with debilitating dreams or with remorse. (46)

こうして、人間は野蛮の欲望を前にして墮落覚悟で楽園を焼き払うという選択をしたのである。

#### 4. 盗まれたことば、隠された意味

それにしても、なぜスタイナーは自分のユダヤ人虐殺説をヒトラーに言わせたのであろう。なぜホロコーストが起こったか。スタイナーが数々のエッセイで論じている説は説得力があり、読む者を引き込まずにはおかない。それ自体批判されたり、非難される余地はみじんもないはずだ。ホロコーストが起こった理由、原因を彼なりに解明してみせただけで、反ユダヤの色合いは全く感じられないからだ。彼自身ユダヤ人であること、そしてヒトラー台頭の時代、命からがらアメリカに渡ったことを考えれば、まさか彼がヒトラー親派などとは、考えも及ばない。であるのに、なぜわざわざ自分のエッセイでの言説をヒトラーにそのまま語らせるような、いわば「自虐的」とまで言いたくなるようなまねをしたのか。マッコビー、ローゼンフェルドはじめ、さまざまな評者の批判に晒されながらも、それを喜んでいる節さえある。結論から言ってしまうと、彼

はヒトラー親派でも、ナチス親派でもない。これはいずれははっきりさせるが、だとしたら、このような危なっかしい綱渡りの手法を用いて読み手に伝えようとした小説の意味は何なのか。ヒトラーを愚弄するどころか、英雄視するようなまねをしてまで伝えたいこととは、いったい何か。その意味を読み解く仕掛けは小説の結末にある。最終章、ヒトラーの弁明の最後の最後に準備されている。まず、そのシーンをそのまま引用してみよう。演説も終わり、その影響、周りの情景を映し出すシーンだ。

Teku had not understood the words, only their meaning. Whose brazen pulse carried all before it. He had leaped up to cry out "Proved." To cry it to the earth twice and twice to the north as is the custom. But the air seemed to be exploding around him. Loud drumbeats hammering closer and closer, driving his voice back into his throat. He looked up, his ears pounding.

The first helicopter was hovering above the clearing. The second (170)

テク (Teku) とはナチ・ハンターたちの現地案内人、南米先住民族の一人だ。ヒトラーの演説をナチ・ハンターたちと聞いているが、テクにはことばがわからない。ヒトラーが何をしゃべっているのかわからないが、ただ「意味」はわかる。だからテクは、大地と北に向かって二度ずつ「立証された」と叫ぶ。しかし、その叫び声も空中に停止している、おそらくマスコミのヘリコプターの轟音によってかき消されてしまう。裁判の席で聞いている者たちにはヒトラーのことばは当然わかる。彼のことばはハンターたちの耳には弁解として聞こえているはずだ。今更、総統だったときの演説のように感動的に響くはずはない。だがテクにはわからない。ことばがわからないが、ただ「意味」はわかると書いてある。つまり、ヒトラーのことばは、テクには弁解として理解されていないのだろう。逆に言えば、ハンターたちには、ヒトラーのことばの意味がおそらく伝わっていないのだろう。ことばはわからないが、意味はわかる。ことば

はわかるが、意味がわからない。こういう図式がここに展開する。

繰り返すが、このヒトラーのことは、どう考えても自己正当化の何ものでもない。助かりたい一心で、あるいは助からなくても、とにかく自分の行動が正しかったことを伝えようとしているだけだ。ハンターたちも今更催眠術にはかかるまい。地獄のことはだまされるはずはない。結果は見えている。有罪だ。南米に逃げ込んだ大方の实在のナチ残党たちがそうだったようにおそらく死刑。重要なのは、ことばを知らない先住民テクだけが感じ取った「意味」だ。何が「立証された」というのか。そしてもう一つ重要なこと。それは空に浮かぶヘリコプターの轟音にかき消される「立証された」というテクの叫び。何の意味が立証され、何がかき消されてしまったのか。

スタイナーが仕組んだ最後の情景に込められた意図はあまりにも巧妙だ。テクはヒトラーの何に対して「立証された」と言ったのか。おそらくここを読み違えたか、読み忘れたために、つまり本来スタイナー自身のことばをヒトラーが「駄弁っている」という表面的な読みしかしないから、とんでもない誤読が生じてしまったのだ。

短波ラジオからかろうじて聞こえてくるヒトラーの演説の声に耳を傾けた幼少時代に思いを馳せたスタイナーは、ヒトラーが投げかけるばかりでかく胸糞の悪くなるような陰を思い起こしている (*Errata* 8)。その時の記憶が一つの句読点となって、後に『A. H. の移送』を書く起点になったことを告白しているが、その声の雑音と混じり合った不愉快な響きの記憶が執筆のきっかけになったことを知っている読み手としては、物語におけるスタイナーとヒトラーの声の重なりは雑音混じりの不協和音としてしか迫ってこない。ロン・ローゼンバウム (Ron Rosenbaum) は、この物語を「フランケンシュタイン物語」と銘打って、ヒトラーを作家の手を離れた一種の化け物として捉えているが (300)、残念ながら、ヒトラーは作家スタイナーの手を離れたわけではない。スタイナーは、時にはヒトラーの黒子となり、時には二人羽織の手となり、腹話術師の口となってヒトラーという人形に語らせる。ヒトラーの口から出たことばは、弁解以外の何ものでもないように聞こえる。ヒトラーが語っているように見えるからだ。しかし、目をつぶれば、それはまぎれもなくスタイナーの声であり、

弁解の意味合いはたちまち消える。彼は「ホロコーストと『折り合いをつける』という考えは、俗悪であり、甚だしく下品な考えである」(*No Passion Spent* 345) と言っているが、ナチスの連中や、ヒトラーごときに操られるような器でないことは言うまでもない。わざわざ敵の大將の仮面をかぶり、危険を承知の上で、サーカスの綱渡りまがいの曲芸を仕組んだのだ。だからおそらく、最終場面で、ことばを知らないテクが表向きのヒトラーから理解した「意味」とは、つまりことばによらない陰の、つまりスタイナーの仕組んだ意味でなければならない。

ロバート・ボイヤーズ (Robert Boyers) は、小説の結末がヒトラーの演説で終らなければならなかった理由として、「言語の盗用」という問題をあげているが (170)、至言というべきかもしれない。ヒトラーが自分の弁明という目的のためにスタイナーの考えを盗用する。そしてスタイナー自身の発言の趣旨ないし意図を故意に無視し、あるいは侵害し、全く異質の目的に供する、ということであろうか。言語のインフレーションのなかで、ぶくぶくと太ったことばが化け物と化して、発話者の意味から離れ、ふらふらと歩き始める。ヒトラーの盗用したことばは、もとの意味からはずれ、フランケンシュタインとなって歩き出す (ように見せかける)。これが、スタイナーのヒトラー演説の仕掛けだ。ことばを膨らませるだけ膨らませ、最後にできるだけ長く、ヒトラーの気の済むまで語らせること、そして意味をはき違えさせて発言させること、これがヒトラー演説に隠された巧妙な仕組みだ。ことばの世界に生きないテクだけにしか分からない沈黙の意味。それでいながら、確実に伝わる意味。それでいながら、ことばを知る者には理解困難な意味。このような危うい罫を、スタイナーは物語の最後の最後に読者に仕掛けているのである。仕込みは万全、ヒトラー礼賛者と見せかけ、わざわざヒトラーのことばに仕立てあげて、意味を伝えるべきことばそのものの脆さ、存在の危うさを鋭く切ってみせる。

なぜ、危ういかと言えば、もう一つ、厄介な罫の解明を読者に迫っているからだ。意味を理解したアマゾン先住民テクに「立証された」(ヒトラーのことばでなく、スタイナーの意味だ) と叫ばせておきながら、実はおそらくマスコミのヘリコプターの轟音にその声が掻き消されてしまっているという現実だ。



いち早くマスコミに知れ渡ったヒトラー逮捕、裁判劇は、世界中に配信されるだろう。そして、テクが理解した「意味」はそっちのけで、ヒトラーの弁明の演説だけが知れ渡るに違いない。ここにことばの人スタイナーの苦悩が見えないか。言語か沈黙か。ことばを超えたことばの意味は、嘆かわしくも、空を舞うヘリコプターが象徴するように、ことばに踊り踊らされる喧しい世間に弄ばれ、醜く肥満したことばだけが大手をふるい、意味そっちのけで飛び回ることばの限界を知った上でものを書いているスタイナーは、沈黙の誘惑に駆られながらも、それでも言語という綱渡りの綱の上を行き来するだろう。絶望はない。しかし、どこかで、アドルノのように、ことばの野蛮さを痛感しながらも評論家としてことばに頼らなければ生きて行けない自分に、言語か沈黙か、その板挟みのなかで、痛みかゆみを感じているのかもしれない。音楽に魅せられ、数学の無限の空間に思いを馳せ、絵画の窓から見える深みある意味の世界にこだわったスタイナーは、それでも言語に生きることを選んだ。賢明な選択かどうかは後世に委ねるとして、彼の懸命の選択であったことには違いない。あえてことばを濫用し、揺るがして、雪だるまのように肥満した姿を読者に晒す。その上でことばの力を確認する。これが『A. H. の移送』でスタイナーが試みた実験ではなかったか。

## 引証文献

- Adorno, Theodor W. *Prisms*. Trans. Samuel and Shierry Weber. Cambridge, MA: MIT P, 1981.
- Boyers, Robert. *Atrocity and Amnesia: The Political Novel Since 1945*. New York: Oxford UP, 1985.
- Langer, Lawrence L. *The Holocaust and the Literary Imagination*. New Haven: Yale UP, 1975.
- Maccoby, Hyam. "George Steiner's Hitler" *Encounter* LVIII No. 5 (1982): 27-34.
- Rosenbaum, Ron. *Explaining Hitler*. New York: Random House, 1998.
- Rosenfeld, Alvin H. *Imagining Hitler*. Indiana UP, 1985.
- Steiner, George. "Dying Is an Art." *Language and Silence. Language and Silence: Essays on Language, Literature, and the Inhuman*. New York: Atheneum, 1967.

- 295-302.
- \_\_\_\_\_. *Errata: An Examined Life*. London: Weidenfeld & Nicolson, 1997.
- \_\_\_\_\_. *In Bluebeard's Castle: Some Notes Towards the Redefinition of Culture*. New Haven: Yale UP, 1971.
- \_\_\_\_\_. "K." *Language and Silence. Language and Silence: Essays on Language, Literature, and the Inhuman*. New York: Atheneum, 1967. 118-26.
- \_\_\_\_\_. "A Kind of Survivor." *Language and Silence. Language and Silence: Essays on Language, Literature, and the Inhuman*. New York: Atheneum, 1967. 140-54.
- \_\_\_\_\_. "The Long Life of Metaphor: An Approach to the 'Shoah'." *Writing and the Holocaust*. New York: Holmes & Meier, 1988. 154-71.
- \_\_\_\_\_. *No Passion Spent: Essays 1978-1995*. New Haven: Yale UP, 1996.
- \_\_\_\_\_. *The Portage to San Cristóbal of A. H.* Chicago: U of Chicago P, 1981.
- \_\_\_\_\_. "Postscript." *Language and Silence. Language and Silence: Essays on Language, Literature, and the Inhuman*. New York: Atheneum, 1967. 155-68.
- \_\_\_\_\_. "The Retreat from the Word." *Language and Silence: Essays on Language, Literature, and the Inhuman*. New York: Atheneum, 1967. 12-35.
- \_\_\_\_\_. "Silence and the Poet." *Language and Silence: Essays on Language, Literature, and the Inhuman*. New York: Atheneum, 1967. 36-54.
- Twain, Mark. "Concerning the Jews." *The Complete Essays of Mark Twain*. Ed. Charles Neider. Garden City: Doubleday, 1963. 235-50.